桃色ハーレム合宿

美少女のブルマとスクール水着

早瀬真人
挿絵／ロッコ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

目次

Contents

第一章　女教師と美少女の快感レッスン……4
第二章　ほっそり美少女の強制手コキ……46
第三章　豊満女教師の快感レッスン……93
第四章　泡まみれの混浴エッチ……145
第五章　憧れ美少女の可憐な恥肉……201
第六章　ハーレムは過激な水着で……237

登場人物 *Characters*

大沢 直樹
（おおさわ なおき）

羽根川学園映画研究会所属の二年生。映画監督になることが夢で、小学校のときからの同級生である莉子を主演に自主映画を撮りたいと考えている。

林田 莉子
（はやしだ りこ）

羽根川学園女子バレーボール部所属の二年生。セミロングの黒髪が映える美少女。大人しくて真面目な性格。小学生の時に直樹に好意を抱き、告白したことがある。

松本 貴美子
（まつもと きみこ）

巨乳で色気たっぷりの女子バレーボール部顧問。独身の二十八歳。姉御肌のさばけた性格で、男子生徒はもちろん、女子生徒からも人気のある体育教師。

工藤 祐奈
（くどう ゆな）

女子バレーボール部キャプテンの三年生。勝ち気な性格がセミショートの外見にも表われている少女。貴美子とはただならぬ関係。

第二章　ほっそり美少女の強制手コキ

1

お盆の期間に入り、直樹は朝から晩までオナニーに耽っていた。
莉子のバストアップや下腹部ばかりを集めた編集ビデオと、貴美子と祐奈のレズシーンの映像を交互に見ながら、皮が擦り切れるのではないかと思うほどペニスをしごきまくった。
莉子を祐奈の代役に、はたまた貴美子を自分に置き換え、毎日のようにあらゆる妄想で快楽を貪った。
今日もかれこれ三回目の放出を数え、身体はさすがに鉛のように重い。
亀頭の先端をティッシュで拭った直樹は、大きな溜め息をついた。
(ホントは、こんなことやってる場合じゃないんだよな。夏休みも半分過ぎちゃったし、いい加減に行動を起こさないと)
バレーボール部の前期練習は終了し、今は休養期間に入っている。

来週から始まる後期の練習は合宿形式なので、莉子が学校に出てくることはまずないだろう。
つまり、彼女とは新学期まで顔を合わせる機会がなくなるということだ。
一刻も早く主演女優の承諾を取りつけ、夏休みが終わるまでに撮影を開始したい。
直樹はお盆の期間中に、直接電話で出演交渉をするつもりでいた。
莉子の携帯番号は知らなかったが、生徒名簿から自宅の電話番号は把握している。
だが、いつまで経っても直樹の決心は鈍ったままだった。
何度も携帯を手にしたものの、あまりの緊張で説得する言葉が頭から飛び、そのたびに先送りしてきたのである。
「はあっ、だらしないなぁ。男なら覚悟を決めろ！」
これ以上、ためらっている時間はない。
丸めたティッシュをゴミ箱に放り投げ、短パンを穿きながら机の端に置いてある携帯に目を向ける。
深呼吸したあと、椅子に座りなおした直樹は、真剣な表情で携帯を手に取った。
アドレス画面に『林田莉子』の名前を表示させただけで、心臓が暴れだし、顔から血の気がスーッと失せていく。

（お父さんやお母さんが出たら、なんて言おう。ええい、そのときはそのときだ！）
意を決した直樹が通話ボタンを押そうとした瞬間、携帯から軽快なメロディが鳴り響いた。
「あ、じ、じいちゃんっ！」
なんと間が悪いのだろうか。
元中学の校長をしていた母方の祖父は、七十三歳になった今でも、病気知らずの生活を送っていた。
定年退職したあとは、直樹の住む場所から電車で二時間ほど離れた海の近くで民宿を経営している。
祖父に言わせると、もうけは完全度外視。ボケ防止のためらしいのだが、寂れた民宿は年中暇なようで、小遣い程度の稼ぎにしかならないと苦笑していた。
いつ会っても元気溌剌で、子供の頃から大好きだったのだが、高校に入学してからは一度も遊びに行っていない。
久方ぶりに、孫の声を聞きたくなったのだろうか。
（あーあ、せっかく決心がついたのに）
直樹は仕方なく、苦虫を噛みつぶしたような顔つきでボタンをプッシュした。

『おお、直樹か！　久しぶりだなぁ』
「じいちゃん、いったいどうしたの？」
『いや、実は今、病院にいるんだよ』
「え!?」
祖父の意外な言葉に、直樹は素っ頓狂な声をあげた。
「何で!?　病気？　それとも怪我？」
『いやいや、心配には及ばんよ。ぎっくり腰で、十日ほど入院するだけだから』
「なぁんだ、よかったぁ。でも……本当に大丈夫なの？」
『わしのほうは大丈夫なんだが、民宿のほうが困ったことになってな』
祖父の返答に、直樹はケラケラと笑った。
「入院の期間中、閉めておけばいいじゃん。どうせ、客なんて来ないんでしょ？」
『バッカもん！　夏は一番の稼ぎどきなんだ！　客の予約はちゃんと入っとる。十五人もな』
「へえっ、珍しいじゃない。そんなにたくさん来るなんて」
『そこでものは相談なんだが、わしが入院しているあいだだけ、バイトに来てくれんか？』

「は、はあ？」
突然の申し出に、思わず目をしばたたかせてしまう。
その直後、ある事実を思いだした直樹は慌てて拒絶した。
「じょ、冗談でしょ⁉　だってあの民宿、じいちゃん一人で切り盛りしてるんだから、俺なんかが行っても、そんな多くの客の対応なんてできないよ！」
『なあに、心配はいらんよ。朝と夕の食事は近所に住むおばちゃんが手伝いに来てくれる手はずになってるし、昼食は作らんでもいいんだから。どうだ？　バイト料は弾むぞい』
「うーん」
お金は欲しかったが、今は自主映画制作のほうで頭がいっぱいだ。
返事に迷っていると、祖父は電話口で含み笑いを洩らした。
『お前にとっちゃ、いい話だと思うぞ』
「ど、どういうこと？」
『十五人の客というのは、羽根川学園の女生徒と女教師だからな』
「え、ええっ？　女生徒と女教師って……ま、まさか⁉」
『女子バレーボール部の合宿だよ。何でも、これまで合宿場所にしていた旅館が潰れ

たらしい。そこで、わしの民宿に白羽の矢が立ったというわけだ』
降って湧いたような幸運に、頬が自然と緩んでくる。
『どうかな？　昼食は自分たちで作るらしいし、部屋の掃除や洗濯も部員たちがするそうだから、そんなにキツいとは……』
「やります。ぜひやらせていただきますっ！」
こんなにおいしい話を断ることができようか。
よくよく考えてみれば、祖父の経営する民宿は、小さいながらもグラウンドを所有し、プライベートビーチに近い海岸も目と鼻の先にある。
土のグラウンドは、もともとテニスコートとして使用していたらしく、ネットを張る支柱を伸ばせばバレーボールの競技も可能で、貴美子は合宿場所にぴったりと判断したのだろう。
（待てよ、待てよ！　莉子ちゃんの誕生日は八月二十二日、合宿中に十七歳を迎えるんじゃないか）
うまく立ちまわれば、主演女優の確約ばかりか、交際に発展ということも考えられる。
先ほどまでの憂鬱そうな顔はどこへやら、直樹の心はすでに祖父の民宿へと飛んで

いた。

翌週の月曜、直樹は朝一で祖父を見舞ったあと、その足で民宿へと向かった。

バレーボール部員たちの到着は、午後一時頃になるはずだ。

これからの八日間、莉子と同じ屋根の下で暮らせるのかと思うと、胸がワクワクしてくる。

デイパックを背中に担ぎ、えっちらおっちらと緩やかな坂道を登っていくと、鬱蒼と茂った林のあいだから民宿の屋根が覗き見えた。

（いやあっ。ここに来るのも三年ぶりだな。あはは、屋根の端のハゲたところ、全然変わってないや）

寂れたボロい建物も、今の直樹の目には御殿に見えてしまう。

「さてと、まずは彼女たちのために冷たい飲み物でも用意しておくかな。今日は特に暑いし」

海から吹くそよ風は心地よかったが、直樹のTシャツはお湯を被ったように濡れていた。

いつもなら頬を伝う不快な汗も、今日ばかりは気にならない。

「さあ着いたぞっ！」
意気揚々と林を回りこんだ直樹は、次の瞬間、民宿の玄関口に座りこんでいる女子の集団にギョッとした。
「あ、あれ？　ま、まさか」
視界に、ひと際輝く美しい少女が入る。
（り、莉子ちゃん⁉）
女子部員の中では彼女一人だけが立っていたが、玄関口の前に佇んでいるのは、紛れもなくバレーボール部顧問の貴美子だった。
腰を下ろしている女子部員の中には、部室で痴態を晒していた祐奈の顔も見える。
どうやら彼女たちは、予定より早く到着したようだ。
泡を食った直樹は、駆け足で民宿に走り寄った。
「ご、ごめんなさい！　遅れましたっ！」
声をかけたとたん、手のひらで顔をあおいでいた女子たちが一斉に振り返る。
「あ……直樹君」
唖然としている莉子の呼びかけに目線で応えたあと、直樹は祖父から受けとった鍵をズボンのポケットから取りだした。

「今すぐに開けますから」
玄関扉を開けている最中、貴美子がいぶかしみの表情で問いかけてくる。
「あら、この民宿のおじいさんは……。林田さん、知り合い？」
「あ、あの……実は先週、祖父がぎっくり腰で入院してしまったんです。僕が急遽、代役を務めることになりまして」
莉子が答える前に、直樹は満面の笑みで事情を説明した。
「そう。あなたは、おじいさんのお孫さんなの」
「はい、羽根川学園二年B組の大沢直樹ですっ！」
「え？　あなた、うちの学園の生徒だったの？」
「至らない部分はあるかと思いますが、じいちゃんの代わりに一生懸命がんばりますので、どうぞよろしくお願いいたします！」
深々と頭を下げ、精いっぱいの営業スマイルで対応した直樹だったが、その口元はすぐさまひくついた。
莉子と貴美子がまだ惚けたような表情をしているなか、他の女子部員たちは明らかに厳しい視線を向けていたのだ。
同世代の少年が身近にいたのでは、部活動に集中できないと思ったのだろうか。

（ひょっ、ひょっとして……ビデオカメラ片手に校内をうろついていたのが、俺だとわかっているんじゃ）

もしそうだとすれば、盗撮少年の噂は、直樹が考えていた以上に広まっていたことになる。

莉子にチラリと視線を向けると、彼女はまだぽかんとした顔をしていた。

「まあいいわ。この民宿は、学生時代に友だちと来たことがあったのよ。それを思いだして連絡してみたら、幸いにも空きがあるって言われて」

「そ、そうだったんですか。いつも合宿に使っていた旅館が潰れたっていう話は、じいちゃんから聞いていたんですが」

「もしかすると、これから毎年お世話になるかもしれないわよ」

「あ、ありがとうございます！」

「ふふ、よろしくね。みんな、挨拶なさい」

女子部員たちはモゴモゴと口の中で呟き、中には胡散臭そうな目つきで頭しか下げない者もいる。

莉子を除いた全員が、何かを言いたげな、不満のありそうな顔つきだった。

「声が小さい！」

「よろしくお願いしまーす！」
「こ、こちらこそ」
顧問の一喝で事なきを得たものの、出鼻をくじかれた直樹は、ただ引き攣った笑いを浮かべることしかできなかった。

2

顧問の女教師一人、女子部員十四人。
総勢十五名の対応は、想像以上にキツい仕事だった。
部員たちを部屋に案内したあと、直樹はさっそく祖父から預かったメモに目を通した。
食材の手配、民宿内外の掃除、寝具の用意など、その他の雑用がびっしりと書きこまれている。
さっそくユニフォームに着替えた部員たちは、グラウンドに飛びだし、ネットの設営をしているようだ。
もちろん彼女たちのブルマ姿を眼福している暇はなく、ひと通りの仕事を終えた直

樹は、そのまま夕食の準備に取りかかった。
パートのおばさんの手助けがあるといっても、ぼんやり眺めているわけにはいかない。
指示を受けながら料理を作り、食器の用意や配膳と、目が回るような忙しさで、直樹は初日にしてへとへとに疲れてしまった。
（これが、あと八日間も続くのかよ。じいちゃんは二、三日で慣れるって言ってたけど、バレーボールの練習どころか、パソコンを見ている余裕もないじゃないか）
夜は持参したノートパソコンで編集作業をするつもりだったのだが、あまりの疲労感でとてもそんな気は起こらない。
汚れた食器を洗い、炊事場の掃除を終わらせた直樹は、祖父の部屋に布団を敷き、仰向けに寝転がっていた。
（でも……宿泊客は全員女の子だもんな。莉子ちゃんが入ったお風呂に入れるなんて、こんなチャンスは滅多にないぞ）
壁時計の針は、午後十時を過ぎている。
この時間なら、女子たちは全員入浴を済ませたことだろう。
スケベ心がムクムクと頭をもたげるも、さすがにこの日ばかりはオナニーする気力

もなかった。
（まあいいさ、時間はたっぷりあるんだし。果たして、明日からどんな展開が待ち受けているのか……）
愛くるしい美少女の顔が頭に浮かぶと同時に、猛烈な睡魔が襲ってくる。
まだ戸締まりと風呂場の掃除が残っているにもかかわらず、直樹はいつの間にか泥のように眠っていた。

翌朝、直樹は炊事場で朝食作りに取りかかっていた。
昨日はどうなることかと思ったが、睡眠時間はたっぷりあったので、身体の調子はすこぶるいい。
ごはんに味噌汁、ハムエッグに納豆、海苔にたくあんと、今日の献立は朝食の定番メニューで、それほど手間はかからない。
すでに女子部員たちは起きているのか、廊下側にある洗面所から声が聞こえていた。
朝食の時間は午前七時半、そろそろ顔を出す頃だろう。
大きな電気釜と味噌汁の寸胴鍋をキャスターに乗せたところで、パートのおばさんがエプロンを外しながら問いかけてくる。

「大沢君、あとは一人で大丈夫？」
「あ、大丈夫です。ありがとうございました」
「じゃ、行くわね。亭主と子供の朝食を作らないと。また夕方に来るから」
これからまだ食事を作らなければならないとは、頭が下がる思いだ。
炊事場の裏口から出ていくおばさんを見送った直樹は、そのままどんよりとした空を見あげた。
「あれ？　何だか空模様が怪しいな」
カンカン照りの日が続いていたので、涼しいのはけっこうなのだが、雨が降った場合、バレーボール部はどうするのだろうか。
（そう言えば、貴美子先生がミーティングに食堂を使わせてほしいって言ってたけど、ちゃんと雨の日のケースも考えているんだろうな。おっと……茶碗と箸を出しておかないと）
炊事場に戻ろうとしたその刹那、直樹の耳にか細い鳴き声が届いた。
林の中から、一匹の痩せこけた子猫がよろよろと出てくる。
「あれ？　どうしたんだ、お前。母親とはぐれちゃったのか？　ちょっと待ってろよ」
直樹は炊事場の冷蔵庫からミルクを取りだし、小皿に注ぎ入れると、すぐさま取っ

て返した。
よほど腹を空かしていたのか、子猫はミルクに顔を突っこむようにしてピチャピチャと舐めている。
母親が大の生き物嫌いなので、ペットを飼った経験はないのだが、直樹は子供の頃から動物が大好きだった。
犬や猫はもちろんのこと、小動物などは見ているだけでも安らぎを与えてくれる。
「かわいいなぁ。腹が空いたら、いつでも来いよ」
目を細めて身体を擦っていた直樹は、突然背後から響いた声音に肩をピクリと震わせた。
「直樹君……その猫、どうしたの？」
「え？」
振り向くと、白いTシャツとハーフパンツ姿の莉子が、目をぱちくりさせながら佇んでいた。
「あ、いや。そ、そこの林から出てきたんだ。母親とはぐれちゃったみたいで」
美少女は何も答えず、そのまま外に出てきて、直樹のとなりにしゃがみこんだ。
首筋からフローラルな香りがふわりと漂い、思わず鼻がひくついてしまう。

（あぁ、いい匂い。何で女の子って、こんなに甘い匂いがするんだよぉ）
莉子はにこやかな顔で猫を撫でさすり、直樹は心臓をドキドキさせながら彼女の横顔を見つめていた。
「……覚えてる？」
「え？」
「小学生のとき、捨て犬の飼い主をいっしょに捜したこと」
「う、うん。覚えてるよ。確か五年生のときだよね」
忘れもしない。それは直樹と莉子が、日直当番をした日のことだった。
日誌を担任に渡したあと、そのまま肩を並べて下校した二人は、小さな児童公園に捨てられていた子犬を保護した。
もちろん、自宅に持ち帰ることはできない。
どうやら莉子の住むマンションはペット不可らしく、二人は近所中を歩き回り、二時間かけて犬を引き取ってくれる人を見つけたのだ。
「あの日の直樹君の必死な顔、今でも忘れないわ」
「え？」
「ずっと犬のことを心配していて、すごく優しいなって思ったの」

莉子の意外な告白に、直樹は目を白黒させた。
自分としては当たり前のことをしたまでで、彼女がそんなふうに考えていたとは思いもしなかったのだ。
（ま、まてよ。確か交際を申しこまれたのって、犬の飼い主を見つけたあとだったよな。ま、まさか……それで俺に好意をもってくれたのか？）
美少女は頬を桜色に染め、恥じらいの表情を見せている。
「昨日も……すごくがんばってたよね」
「いや、あれは、その……仕事だから」
沈黙の時間が流れ、緊張感が身を包みこんだ。
莉子の様子を見る限り、まだ自分に気持ちがあるのかもしれない。
（チャ、チャンスじゃないか？　ここで一気に主演女優の話をして、雰囲気次第では好きだということも）
唾を飲みこみ、いざ気持ちを告げようとした瞬間、彼女の口から思わぬ言葉が放たれた。
「直樹君って……カメラが趣味なの？」
「え？」

麗しの美少女は、直樹がビデオカメラ片手に校内をうろついていたことを知っている。

夏休みのわずか一週間という短い期間だったが、やはり女子部員たちのあいだで、かなりの噂になっていたのだ。

（ど、どうしよう？　いや、これは逆に主演女優の話をするきっかけになるんじゃないか？）

意を決した直樹は、やや目を伏せながら答えた。

「俺……実は将来、映画監督になりたいんだ」

「映画監督？」

「うん。高校を卒業するまでに自主映画を一本作って、毎年開催されている映画コンクールに出品するつもりなんだ。配役とかはまだ決まってないんだけど、映画の舞台はうちの学校だよ。ほら、夏休みに入った頃、水飲み場で会ったでしょ？」

「……うん」

「あのときも校内にいいロケーションがないか、探しに行ってたんだ」

「そう……そうだったの。映画監督か、すごい大きな夢だね」

莉子はびっくりした顔をしていたが、どこかホッとした表情にも見える。

やがてニッコリと笑い、キラキラした瞳を向けてきた。
（ようし！　ここで一気にたたみかけて、主演女優の話を……!?）
覚悟を決めたものの、タイミング悪く、食堂からガヤガヤと女子たちの賑やかな声が聞こえてくる。
内心舌打ちをする直樹の前で、莉子は猫の頭を軽く撫でたあと、すっくと立ちあがった。
「これからの一週間、よろしくね」
「う、うん。こちらこそ」
踵を返し、裏口へと歩みかけた美少女の足がピタリと止まる。
莉子は前を向いたまま、小さな声でぽつりと告げた。
「あの……先生とキャプテンには気をつけてね」
「え？」
ひと言だけ言い残し、少女はそのまま民宿内に入っていく。
どういう意味なのだろう？
もしかすると彼女は、貴美子と祐奈の関係を知っているのだろうか。
とにもかくにも、莉子と込み入った話ができたのは大きな前進だった。

肝心なところで邪魔が入ってしまったが、いい手応えははっきりと感じる。
（お前が……幸運を運んでくれたのかもな）
口元をほころばせた直樹は、猫の喉元をさすり、弾むような足取りで炊事場に戻っていった。

3

その日は午後から天候が崩れ、三時過ぎにはバケツをひっくり返したような雨が降りはじめた。
練習を早めに切りあげた部員たちが、小走りで民宿に帰ってくる。
本降りになるのを予期していた直樹は、すでに二十分ほど前に風呂を沸かしていた。
莉子への点数稼ぎはもちろん、祖父のためにも貴美子には好印象を与えておかなければならない。
自分の対応いかんで、当民宿がバレーボール部の合宿場所として引き立ててもらえるかどうかが決まるのだ。
（よし、もうちょっとで入れるぞ）

湯加減を確かめ、浴室から出てきた直樹は、眼前に佇むブルマ姿の莉子にドキリとした。
濡れた髪やシャツよりも、むちっとした太腿がどうしても気になってしまう。
直樹はやや目を伏せ、照れくさそうに口を開いた。
「あ、ごめんね。お風呂はもうすぐ沸くから、あと十五分ほど待ってもらえる？」
「うん、ありがとう。でも、それより……部屋の天井から雨が漏れてるの」
「え、ええーっ⁉」
古い建物だけに、ありうるトラブルだ。
直樹は莉子とともに二階への階段を駆けのぼり、彼女の宿泊部屋に足を踏み入れた。
「あ、ホントだ」
天井の隅から雨水がポタポタと垂れ、下に置かれたバケツの中に滴り落ちている。
「すぐに洗面台の下からバケツを持ってきて、周りにタオルを敷きつめたんだけど」
それでも畳は広範囲にわたって濡れており、莉子と同室の女子部員二人は不安そうに天井を見あげていた。
（ま、まずいな。たぶん屋根のハゲていた部分から、雨水が染みこんだんだろうな。これは大きなマイナスポイントだぞ。何とかしなきゃ）

幸いにも、部屋はまだ余っている。
直樹は莉子たちを空き部屋に移動させ、工具箱片手に、すぐさま屋根裏の修理に取りかかった。
「直樹君が修理するの？」
「うん、どこまでできるかわからないけど、この廊下の端から天井裏にのぼれるはずなんだ」
丸椅子を踏み台代わりに天板を押すと、埃がブワッと舞い落ちてくる。
「あ、ちょっとどいてて」
「うん……ごめんね」
「君が謝ることじゃないよ、こちらが悪いんだから。あ、お風呂はそろそろ沸く頃だから、順番に入ってもらってね」
心配そうに見つめる莉子に笑みを見せたあと、直樹は天井裏に這いのぼり、懐中電灯の明かりをつけた。
（そう言えば、小学生のときに一度潜入して、じいちゃんに怒られたことがあったな。天井って、ベニヤ板みたいに薄かった覚えがある）
もちろんあの頃より体重は増えており、下手なことをすると天井に穴を開けかねな

い。
直樹は四つん這いの体勢で、太い梁伝いに進んでいった。
（それにしても、すごいムシムシしてるな。温かい空気は上にのぼるらしいけど、まるでサウナの中に入ってるみたいだ）
すでに額には大量の汗が滲みだし、瞼のほうまで滴っている。
直樹は指先で汗を拭い、慎重に這い進んでいった。
雨漏りしている部屋は、天井裏への入り口とは正反対の方向にある。
梁自体もかなり古いのか、一歩ごとにギシギシと軋む音が聞こえてきた。
（あれ……何だ？　天井から光が洩れてるぞ）
どうやら天板の一枚が反りあがり、他の天板とのあいだに隙間ができているようだ。
光は真下の部屋の照明だろう、何気なく見やった直樹は次の瞬間、目をみるみる見開いていった。
（う、嘘っ！　莉子ちゃん⁉）
微かな隙間から、莉子の姿がはっきりと見える。
あろうことか、そこは彼女を移動させた部屋だった。
濡れたユニフォームを脱ごうとしているのか、美少女がシャツに手を添え、ゆっく

りと頭から抜き取っていく。
（あ、あああっ）
莉子が胸に着けていたのは、ピンク色のスポーツブラだった。
彼女は、明らかに着やせするタイプのようだ。
胸の谷間がくっきりと刻まれ、上半分の生白い乳肌がふるんと揺れている。
マシュマロのような膨らみに、直樹は歩を止め、食い入るような視線を投げかけていた。
斜め上からの俯瞰は全体像こそ見えなかったものの、頭を下げれば少女のバストアップ、頭を上げれば下腹部を確認することができる。
莉子はやや前屈みになり、次に赤いブルマを引き下ろしていった。
女性の脱衣シーンは、どうしてこんなに男の欲情をそそらせるのだろう。
腰にぴっちりとまとわりついた布地が、太腿に食いこみながら下りてくる。
直樹は瞬きもせずに、猛禽類のような目つきで室内を凝視していた。
ブラと同系色のパンティが露わになり、心臓が激しい鼓動を打ちだす。
こちらもスポーツ用のショーツなのだろうか、ブルマからはみ出ないよう、切れこみが深く、布地面積もやたら少なかった。

一見すると、際どいハイレグビキニを着用しているようだ。
（ああ、カメラがあったら、お宝映像をゲットできたのに！）
まるで条件反射のように、大量の血液が股間に流れこむ。
股の付け根に食いこんだ淫らなショーツ、デリケートゾーンの抜けるような白い肌、プディングのように揺れる内股の脂肪。
それらが絶妙のバランスを誇り、ふっくらと盛りあがった恥丘の膨らみとともに強烈なエロチシズムを放っていた。
太腿のあいだに余分な隙間はなく、かと言って太すぎるわけでもない。
惚れぼれとするような美しいY字ラインが、童貞少年の胸を甘く締めつけた。
莉子はもちろん、覗かれているとは夢にも思っていないようだ。
大胆にもスポーツブラを外し、ふっくらとした生乳をさらけ出す。
（お、おおおーっ）
大きさとしては、貴美子と祐奈の中間ぐらいだろうか。
形のいい球体は全体がツンと上を向き、中心部には桜色の小さな乳暈と乳首がちょこんと愛らしい姿を見せている。
きめの細かい肌には、シミの一点もない。

生クリームのようになめらかな肌質、そして流れるような身体のラインに、直樹は惚けた視線を送った。
莉子がやや斜め後ろを向き、今度はショーツを下ろしにかかる。
（あ、あ、あ……莉子ちゃんの生お尻だっ！）
布地がバックからつるんと捲られた瞬間、剥き卵のようなツルツルの桃尻が目を射抜いた。
瑞々しいカーブを描く美尻がプルンと弾み揺らぎ、こちらも重力に負けずに張りつめるように引き締まっていた。
莉子が片足をくの字に曲げ、足首からショーツを抜き取る。
全裸の美少女は、神々しいまでの輝きを放っていた。
あまりの刺激的な光景に、口から涎が滴り落ちてきそうだ。
（莉子ちゃんが前を向けば、あそこが丸見えになるんだ。こ、今度こそ、本当に目が潰れるかもしれないぞ）
そう考えた直後、直樹は貴美子と祐奈のレズシーンを思いだした。
蝶を追っていたレンズが、たまたま彼女たちの媚態をとらえたとはいえ、結果的には盗撮行為と変わりはなかった。

今度は憧れの少女に対し、意識的に覗き見をしようとしている。
我に返った直樹は慌てて目を閉じ、顔をぶんぶんと横に振った。
(だめだ……こんなかたちで、彼女を穢すことはできないよ。雨漏りの修理をするために屋根裏にのぼったんだから)
莉子の信頼を裏切ることはできないし、これ以上の破廉恥行為は男がすたるというものだ。
直樹は真正面を向き、後ろ髪を引かれる思いで再び前進していった。
それでも昂奮のボルテージは頂点にまで達していたのか、海綿体に流れこんだ血液はいっこうに引かず、ハーフパンツの股間がテント状に膨らんでいる。
(う、動くのに邪魔だなぁ。ええい、早く鎮まれっ!)
修理の箇所まで、あと十メートル。
直樹は手の甲で額の汗を拭い、さらに奥へと突き進んだ。
案の定、屋根から雨水が滴り、天板に大きなシミを作っている。
(あと、もう少しだ)
交差している梁に手を伸ばした瞬間、思わぬ事態が襲いかかった。
汗ばんだ手がすべり、身体のバランスを失ってしまったのだ。

（あ、あ、あ……あああぁっ!?）
背中の汗が、一瞬にして凍りつく。
雨漏りのしている箇所とは反対側の天板に、直樹は頭から真っ逆さまに落ちていた。
ドスン、バリッ！
慌てて天板に両手をついたものの、体重を支えきれないベニアが派手な音を立ててひび割れる。
天井は物の見事に穴が空き、直樹の頭は脇の下まで部屋の中に突きだしていた。
「きゃっ！」
「あ、あああっ」
びっくりした顔を向けている少女は、紛れもなく貴美子とレズシーンを演じていた祐奈だった。
しかも彼女は着替え中だったのか、すでにシャツとブルマ、ブラジャーを脱ぎ捨て、スポーツショーツ一枚の姿だったのだ。
三年の部長ということで、祐奈は一人部屋を割り当てられており、他の女子部員の姿は見えない。
「す、すみませんっ！　屋根裏の修理をしようと思ったんですが、天板のほうに落ち

ちゃって」
直樹は事情を説明し、何とか脱出を試みようとした。
顔面を汗だくにさせながら、全身に力を込め、頭を引っこめようと両足で踏ん張る。
次の瞬間、足下でミリミリと板の軋む音が響き、またもやバリンとけたたましい音が轟いた。
「あ、あわわわわっ！」
重力をなくした下半身が、室内にズボッと落ちこむ。
直樹の身体は哀れにも、くの字の体勢で、頭と下腹部だけが部屋の中に宙ぶらりんの状態になっていた。
（し、信じられない！　さ、最悪だよっ！　しかも女の子の着替え中なんて⁉）
こんなカッコ悪い姿を莉子に見られたら、間違いなく軽蔑されてしまうだろう。
祐奈は口元を手で押さえ、眉間に皺を寄せている。そして埃から逃れるように後ずさり、キッと睨みつけてきた。
「す、す、すみませんっ！　あの、その、申し訳ないんですけど、た、助けてもらえませんか？」
今の状況では、もはや一人で脱出するのは不可能だ。

泣き顔で懇願すると、祐奈は一転、冷ややかな微笑を浮かべた。
「ふうん、今度は覗き見しようとしてたんだ？」
「え？」
「そうでしょ？　白状しなさいよ」
「そ、そんな……」
「言い訳したって信用しないわよ。夏休みに入った最初の頃、私たちの練習風景を盗撮してたじゃないの」
「そ、それは……」
やはり直樹の行為は、女子たちのあいだで噂になっていたのだ。
パニック状態に陥った直樹は、餌を待つ金魚のように口をパクパクさせるばかりだった。
「今度は私の裸まで覗くなんて、絶対に許せないっ！」
贅肉のいっさいない裸体、なめらかな白い肌は、確かに大きな魅力を放っている。
だが今の直樹にとっては絶体絶命の危機であり、女の子の裸を愛でているような余裕はいっさいなかった。
他の女子部員たちが入ってきたら、さらに大きな騒ぎになるだろう。

「し、信じてくださいっ！　本当に屋根裏の修理をしていたんですっ!!」
小声ではっきりと告げた直後、祐奈はゆっくりと近づき、ぱっちりした瞳を股間に向けてきた。
「ふうん、屋根裏の修理ね。これを見たら、ますます信用できないわ」
「へ？」
自身の下腹部を見下ろすと、ハーフパンツの中心部がやや左側に小高いテントを張っている。
萎えはじめていたとはいえ、半勃ちペニスは物の見事に男の欲情を示していた。
（あぁっ。さ、さっき、莉子ちゃんのヌードを見ちゃったから）
どう言い訳したらいいのか、もはや見当もつかない。
すでに祐奈は怒っているというより、この状況を楽しんでいるかのように見えた。
少年のたじろぐ様子を、悪戯っぽい視線で見つめている。
「これじゃ、屋根の修理なんてできないでしょ？」
「はうっ！」
右手の人差し指で股間の頂をピンと弾かれ、直樹は狂おしげな呻き声をあげた。
「盗撮の件と私の裸を覗き見たこと、たっぷりとお返しをさせてもらうからね」

「あ、あ、あ……ま、待って」
祐奈はもう聞く耳を持たず、ハーフパンツの腰紐を外しにかかる。
「私の裸を見ながら、オナニーするつもりだったんでしょ？」
「ち、違う……あ、あああっ」
抵抗する間もなく、直樹のブリーフはハーフパンツごと引き下ろされていった。

4

半勃ちの包茎ペニスが、少女の眼前でぶるんと弾けでる。
祐奈はクスクスと笑いながら、パンツを足首から抜き取った。
いつかは恥部を女の子に見せる日が来るのだろうと、何度か夢想したことはあるが、まさかこんな特異な状況下で実現するとは考えてもいなかった。
股間を隠すことすらできず、少女の熱い眼差しが牡器官に食い入るように注がれる。
「か、か、勘弁してくださいっ！」
「ちょっと、そんなに大きな声を出すと、他の部員たちに気づかれちゃうわよ。天板を破ったときの音だって聞かれてるかもしれないんだから」

「は……ひっ！」
莉子はもちろんのこと、女子部員たちの驚愕と侮蔑の眼差しを想像すると、恐怖で身が竦んでしまう。
「この部屋の両どなりの部員たちはお風呂に行ったから、大丈夫だと思うけどね。私はちょうど携帯に友だちから連絡が入って、入浴はあとまわしになったというわけ。ふふっ、君にとっては幸か不幸かわからないけど」
祐奈は勝ち誇った笑みを浮かべ、再び股間に視線を向けてきた。
「きゃん！　おチンチン、皮被ってるっ。私、包茎君を見るの初めてだわ」
「あ、ああっ」
忸怩たる思いに、腰が自然とくねってしまう。
もちろん内股にしてもペニスを隠せるわけもなく、勃起は完全に晒しもの状態だった。
「でも、けっこう大きいわ。ふふっ、オナニーばかりしてるんでしょ？」
図星を指され、顔が火箸を当てられたように熱くなる。
祐奈はやはり恋愛経験が豊富なのか、男の生理にも詳しいようだ。
「さ、どうする？」

「え？」
「私にお仕置きをされるか、それとも他の女の子たちの見世物になるか、君に選ばせてあげる」
冗談ではない。
祐奈一人に見られているだけでも、死にたいほど恥ずかしいのに、うら若き乙女たちの衆目に耐えられるはずがない。
それ以上に、この情けない姿を莉子だけには見られたくなかった。
（お仕置きって、いったい何をされるんだよぉ）
女教師とレズ関係にあるぐらいなのだから、やはり淫らな行為だろう。
次の瞬間、直樹はハッとした。
（そ、そうだ！　俺は彼女の秘密を知ってるんだ。それを交換条件にして、この場を切り抜けられるんじゃないのか？）
部室での一件を口にしたら、祐奈はどんな顔をするのだろう。
だが直樹は、すぐに思いとどまった。
ボーイッシュな少女は、負けん気の強い性格に見える。
もし逆鱗に触れ、感情的な行動に出られたら……。

「あ、あの……」
「何？」
「このことは内緒にしてくれますか？」
「君に条件をつけてくる資格があると思う？　まあ、でもそれは君の反省次第かな」
もはや何を言っても、聞き入れてはくれなさそうだ。
直樹は目を伏せ、消え入りそうな声で答えた。
「お……お仕置きで……お願いします」
「そう、わかったわ！　じゃ、たっぷりとお仕置きしてあげる！」
目を爛々と輝かせる祐奈は、まるでおもちゃを与えられた子供のようだ。
覚悟を決めた直樹だったが、女の子から受ける『お仕置き』という言葉が、無意識のうちに牡の本能を刺激していった。
いったんは停滞していた欲情が中心部で逆巻き、血液が海綿体になだれ込んでいく。
半勃ちのペニスは、みるみる鎌首をもたげていった。
「あら、やだ。まだ何もしてないのに、おチンチンどんどん大きくなっていくわよ。先っぽから、いやらしい汁まで垂らしちゃって。頭の中は、エッチなことしか詰まってないのね」

「あ、ああっ」
軽い言葉責めが、少年の被虐心に火をつける。
男根は完全勃起を取り戻し、裏茎に太い芯を注入させていた。
(な、何でこんなに恥ずかしい状況なのに、昂奮しちゃうんだよ)
頭と下半身は別物とばかり、すでに全身の血液は沸騰している。
祐奈はほくそ笑み、細長い指を怒張に伸ばしてきた。
「まずは、おチンチンの皮を剥かないとね」
「はうっ!」
青筋が浮かんだ肉幹に、ふっくらとした指腹が巻きついてくる。
初めて触れられた異性の指の感触は、想像以上の快美を直樹に与えた。
快感電流がペニスから脊髄を駆け抜け、一瞬にして脳幹を痺れさせる。
(あ、ああ、すごいや。軽く触れているだけなのに、こんなに気持ちいいなんて。温かくて柔らかくて、おチンチンが溶けちゃいそうだ)
腰をビクビクと震わせた直樹は、切なげな表情で喘いだ。
「はあぁぁぁっ」
「ふふっ、君は童貞君ね。いい? すぐにイッたらダメだよ」

指先に力が込められ、包皮が徐々に剥き下ろされていく。
亀頭にピリリとした疼痛が走り、直樹は臀部の筋肉を強ばらせた。
包皮は何度か自分で剥いたことはあるが、勃起状態のときは一度もない。
宝冠部が限界まで張りつめているせいか、皮はなかなか反転せず、雁首付近でとどまっている。
それでも祐奈は、強引に捲り下ろそうとしていた。
包皮がえらをギュッと締めつけ、痛みから口元を歪ませてしまう。
「あ……つつっ」
「我慢しなさいよ。大人にしてあげようとしてるんだから」
前触れ液が源泉のように溢れだし、亀頭の先端はすでにぬめっている状態だ。
深奥部の荒れ狂うマグマは、すでに大爆発の瞬間を待ちわびているのだが、宝冠部の疼痛が放出にストッパーをかけていた。
「ほら、生白い先っぽが出てきた。もうすぐ剥けそうだよ」
祐奈は口角を上げながら、容赦なく包皮をズリ下ろす。
(あ、あ……おチンチンの皮が剥かれちゃう)
錐で突き刺したかのような痛みが走った瞬間、包皮がくるんと反転し、スモモのよ

うな亀頭がその全貌を現した。
「いやん、かわいい。おチンチン、ガッチガチだよ！」
祐奈がうれしそうな悲鳴をあげ、剛直を軽くしごきたてる。
包皮が肉幹をスライドした瞬間、腰の奥で大きな振動が起こり、堪えきれない欲情が怒濤のように突きあげた。
「は、はうぅぅぅっ」
溜まりに溜まった牡の淫汁が、鈴口から一直線にほとばしる。
「きゃ、きゃあぁぁぁぁっ！」
噴水のように射出したザーメンは、大きな放物線を描き、少女の眼前で不可思議な模様をいくつも描いた。
「いやっ！」
ペニスから手を離した祐奈が、おののくように後ずさり、ゼリーのような白濁が足下にパタパタと落ちていく。
もちろん、性欲旺盛な少年の射精は一度限りでは終わらない。
腰がしゃくりあがるたびに、二度、三度と脈動を繰り返し、大量の精液を次々に噴出させていった。

「はあはあはあ」
頭の中が朦朧とし、深奥部に甘ったるい鈍痛が広がる。
うっすらと目を開けると、祐奈は眉尻をキッと吊りあげていた。
「もう！　勝手にイッたらダメだって言ったでしょ⁉」
「ご……ごめんなさい」
素直に謝罪しても、少女の怒りは収まらないようだ。
憤然とした表情で、不平不満の言葉をぶつけてきた。
「これじゃ、全然楽しめないじゃない。あーあ、私の部屋まで汚しちゃって。いったいどう責任取るつもり？」
「あ、あの……部屋はあとひとつだけ余っているので、そ、そちらのほうにご案内します」
「そう、それならいいけど。でも……このまま終わったんじゃ、私の腹の虫が治まらないわ」
しばし思案していた祐奈が、再び好奇の目を直樹の股間に向けてくる。
そして何かいいアイデアが閃いたのか、こぼれるような笑みを浮かべた。
背筋がゾクリとし、全身をまとう汗が一瞬にして冷える。

「君……直樹君だったっけ？」
「は、はい、そうです」
「自分の出したモノ、すごい量だよね。見てごらん」
祐奈の足下を見ると、ザーメンが四方八方に飛び散っている。
昨夜はオナニーをしていなかったとはいえ、自分でも驚愕するほどの量だ。
それでもまだ出したりないのか、下腹部は依然悶々としていた。
「信じられないわ」
「え？」
「こんなにたっぷり出しといて、まだビンビンだなんて」
下腹部を見下ろした直樹は、いまだ臨戦態勢を維持しているペニスに目を丸くした。
生まれて初めて体験する異性との淫らな行為が、新鮮な昂奮と刺激を与えているのだろう。
すっかり盛りがついたのか、包皮の剥かれた剛直は、青竜刀のような反りを見せていた。
「ほとんど性獣ね。これじゃ、変なことばかり考えるのも無理ないわ」
心臓はいまだ大きな鼓動を打ち、否定する余裕もない。

直樹が両肩で喘ぐなか、祐奈は何を思ったか、身に着けていたスポーツショーツに両手を添えた。
（え……え？）
臀部から引き下ろしたブルーのパンティが、脚線美の上をするするとすべり落ちていく。
少女は乳房も股間も隠そうとしない。
まるでそこに直樹の存在がないかのような、見事な脱ぎっぷりだ。
真上から覗くクロッチは、黄色い縦筋が刻印され、周辺には葛湯のような分泌液がびっしりとこびりついていた。
おそらく祐奈も、少年を責めたてながら性的昂奮をしていたのだろう。
汚れた下着も峻烈な光景だったが、間近で目にする半円形の乳房、そしてこんもりとした恥丘に煙る若草にも目が奪われる。
だが直樹の驚きは、これだけにとどまらなかった。
祐奈はパンティを足首から抜き取り、そっと近づいてくると、ブルーの布地でペニスを覆い隠したのである。
（あ、あああああっ!?）

少女の体臭と媚臭を含んだ淫らな布が、自分の恥部を包みこんでいる。
柔らかい生地の感触と、生温かい体温が肉胴を通してはっきりと伝わってきた。
（う、嘘っ、嘘ーっ！）
信じられない行為の連続に、身が打ち震え、ペニスが激しいいなきを見せる。
「どう、エッチぼうや。練習のあいだ、私がずっと穿いてたショーツ。気持ちいい？
吸湿性の高い綿素材だから、私の汗や匂いがたっぷりと染みついてるはずよ」
「あ、わわ。はあ、はあぁぁっ」
神経が昂り、まともな言葉が発せられない。
さらに祐奈は、パンティを根元からぐるぐると巻きつかせていった。
「ふふっ、こうやって締めつけておけば、少しは我慢できるでしょ？」
「あふあふっ」
スリムな美少女が一日中穿き続けたショーツ、乙女の恥芯を押しつけていたクロッチが肉幹にまとわりついている。
理性が弾け飛びそうなシチュエーションに、直樹は全身をぶるぶる震わせていた。
「じゃ、とことん楽しませてもらうわよ。今度はすぐにイッたら許さないからね」
祐奈は最後に釘を刺し、ゆったりとした抽送を開始する。

「あ、くううぅっ」
直樹は歯を食いしばり、下腹部に吹き荒れる情欲に必死の抵抗を試みた。
いくら相手が年上とはいえ、同年代の少女の前で、続けざまに射精するわけにはいかない。
祐奈は上目遣いに直樹の様子をうかがいながら、徐々にスライドのピッチを上げていった。
「は、は、はふぅぅっ」
パンティに染みついた少女の匂いと分泌が、肉幹になすりつけられていく。
(あ……あ、じ、自分でするのとは全然違うよぉ)
パンティ越しとはいえ、異性に恥部を触られているという状況に、直樹の分身は早くも熱い脈動を打った。
「もっともっとこすってあげる。どう？　ここをこうしたら？」
「はひぃぃっ」
肉幹をしごきながら、祐奈が空いている左手で陰嚢に愛撫をくわえる。
二つの肉玉を手のひらでコロコロと転がされると、腰全体が浮遊感に包まれ、深奥部で白濁の溶岩流が荒れ狂った。

「こんなのも感じるかな？」
「はうぅぅぅっ」
今度はしなやかな指先が、亀頭の周囲をさわさわと撫であげる。
剥きたての先端に、小さな虫が這い回るような感触が走り抜け、直樹は熱い吐息をこぼしながら額に脂汗を滲ませた。
ボーイッシュな美少女は、想像以上に男を翻弄するテクニックを身につけているようだ。
尿道口から、先走りが沸騰したお湯のように噴きこぼれる。
肉胴に浮きたった静脈が、破裂しそうなほど張りつめる。
恥部に巻きついたふしだらなパンティは、緩むことのないピストンを繰り返し、少年の情欲を一歩ずつ極みまで導いていった。
「君のおチンチンがビクビクしてるの、ショーツ越しにもはっきりと伝わってくるよ。このあとはどうするつもり？」
「は、は、はあっ」
「覗き見したうえに射精までして、今度は私のショーツを汚しちゃうのかな？」
言葉嬲りの連続が、脳漿を煮え滾らせる。

さらに祐奈は、横に垂れ下がっていた布地で亀頭を覆い隠し、肉棒が折れるのではないかと思うほどの律動を繰りだした。
「いやらしい子！　ほら、たくさん出してごらんっ!!」
「あ、あ、あひゃあぁぁぁっ！」
指が上下するたびに、愛液の付着したパンティがペニスをギューギューと引き絞った。
柔らかいなめらかな布地が、過敏な宝冠部と雁首を何度もこすりあげる。
射精欲求とは裏腹に、やはり異性の前で暴発シーンを見せるのは恥ずかしい。
直樹は歯を食いしばって堪えたが、皮肉にも、必死の抑制が快楽をますます増幅させていった。
「イキそうなんでしょ？　我慢しなくてもいいのよ。いやらしいミルクをたっぷり出すところ、お姉さんがちゃんと見ててあげるから」
淫語責めが脳幹を痺れさせ、同時に抽送のストローク幅が増していく。
亀頭から根元までまんべんなくしごきあげられ、巨大な悦楽一色に染まった直樹は、次第に目をとろんとさせていった。
（あ……あ、も、もう……だめだっ）

唇の端を震わせた直後、祐奈は一転して吐息混じりの言葉を放った。
「あぁぁン。おチンチン、ビクビクしてるぅ。尿道口もひくついて、エッチなお汁がたくさん溢れてるのぉ」
艶っぽい声が、自制の結界を打ち砕いていく。
「はあぁぁっ……イッちゃう、イッちゃいます！」
腰に熱感が走り抜けた瞬間、直樹は残るありったけの樹液を射出していた。
「イックぅぅぅぅぅっ」
「きゃンっ、熱いのがドクドク出てきたよっ！」
少女は手の動きを止めることなく、一滴残らず搾り取るように根元からしごきあげていく。
なんと刺激的な射精なのだろう。
筋肉どころか、骨まで溶解しそうな感覚だ。
天井から吊りさげられたまま、全身を痙攣させた直樹は、徐々に意識を遠のかせていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!